

## 2023 年度西洋中世学会大会シンポジウム「西洋中世における人と動物」

### 趣旨説明

坂田奈々絵

本シンポジウムは「動物」を中心テーマとし、西洋中世における人間と動物の様々な関わりを、絵画や文書史料などの多様な角度から描き出すことを目的とする。

近年、人間と動物の関係は様々な角度から見直されてきている。シンガーによる動物解放論を皮切りとして、人間による動物の利用への批判や、動物の主体性に目を向ける議論も盛んに行われるようになった。また倫理的領域にとどまらず、歴史や文学、政治等の様々な営みにおいて、動物に主眼を置き、人間と動物の関係やその境界を問い直す、いわゆる動物研究 (Animal studies) と呼ばれる領域も形成されている。こうした諸分野における動物への学術的な関心の増加と人間中心主義への批判は、動物論的転回 (animal turn) とも称される。

さて、西洋中世の人間—動物理解は、このような思潮において批判されるどころの、まさに人間中心的世界観が基礎となっている。創世記では、人は神の似姿として創造され、また「海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地上を這うものすべて」を支配する存在とされる。くわえて、ギリシア哲学、特にアリストテレスは、人間こそがロゴスを操る唯一の動物であると論じ、それ以外の動物は人間によって使用される存在であるとした。中世における人間—動物関係は、こうした哲学的・神学的源泉を越え出るものではないとされている。しかし昨今の中世研究においても、様々な領域において動物研究は展開されている。このような規範が存在する一方で、実際の中世世界の諸史料を覗くならば、そこには人間と動物の関わり合いや表現が多様に存在しているのである。

本シンポジウムのパネルでは、中世キリスト教における動物の哲学・神学的理解に始まり、人間と動物の実際のかかわり合い、絵画での動物表象の展開、文学に登場する動物達の意義といった、人と動物の関係の諸相について、様々な視点からの報告が行われる。また古代ギリシアの動物表象とその受容の観点からのコメントがなされることで、本テーマに対するより俯瞰的な考察が行われる。さらにフロアとの質疑応答が加わることにより、中世における人と動物の関係について分野を越えて知見を交わし、本邦での中世動物研究の展望について議論する場となることを目指す。

### 「西洋中世における人間と動物の関係——トマス・アキナスの思想の一面——」

山口雅広

現代において思想的観点から人間と動物の関係が考察される時、動物倫理が問題になる。伝統的に倫理の名の下で、人間は人間に対してどう行為すべきかが論じられてきた。ところが今では自然保護や動物福祉への関心の高まりを背景に、新たに動物倫理の名の下で、人間は人間以外の動物に対してどう振る舞うべきかが検討されるようになってきている。

ところで西欧中世に目が向けられ、当時その種の問題は真剣な討議の対象にならなかったかと問われれば、どう答えられるか。代表的スコラ学者トマス・アキナスの立場から答えれば、この種の検討は広い意味では行われた。だが狭い意味では行われなかった。事実キリスト教は、西欧中世世界に共通の思想基盤であり、聖書には、動物を含む自然と人間の関係についての記述が見出される。トマスはこの種の記述を尊重し、その関係を、解釈が必要であるとはいえ原則的には人間によ

る支配的關係として論じる。だが、通常は人間に認められる権利概念を、人間以外の動物にまで拡張しようとする現代の動物倫理的な議論は、研究者による補完の試みはあってもトマスの著述そのものには見当たらない。今回のシンポジウムでは、トマスの思想における以上のような支配の意味や、動物の権利不在のわけを論じる。加えて動物との関わり方が人間の徳の涵養に影響することを指摘する。以上の考察を通して、西洋中世における人間と動物の關係の一面を、思想的観点から浮き彫りにしたい。

### 「中世後期フランスの正史における狩猟と狩猟動物—『フランス大年代記』およびミシェル・パントワン『シャルル6世の年代記』の記述を中心に—」

頼順子

西欧では中世初期から狩猟が盛んに行われており、その営みはアインハルト『カール大帝伝』（9世紀成立）や数多くの文学作品の中で繰り返し言及されてきた。しかしその一方で、ソールズベリのジョン『ポリクラテイクス』（1159）に見られるように、王侯が囲い地を設置して生活のために狩猟を行う平民を締め出し、愉しみのための狩猟に没入することはキリスト教の聖職者による批判を浴びた。こうしたことからカペー朝以降のフランスの王の多くは狩猟を好んだものの、馬上槍試合とは異なり狩猟は私的な娯楽の性格が強く、宮廷の祝祭行事の中に組み込まれ記録されるのは中世末期のことだった。14世紀中葉から後半にかけて、ヴァロワ家の王や王族の宮廷を核として俗語の狩猟書が相次いで成立した際も、狩猟書がフランス王に献呈されることはなかったが、シャルル6世が有翼の白鹿を副紋に採用するなど、王と狩猟の關係が可視化され始める。本報告では、ルイ9世時代に編纂が始まり、14世紀中葉以降の再編によって正史としての地位を獲得した『フランス大年代記』および、その続編に位置付けられるミシェル・パントワン『シャルル6世の年代記』（15世紀初頭成立）における狩猟や狩猟にかかわる動物に関する記述を分析し、14世紀から15世紀初頭のフランス王家の正史における狩猟や動物の位置付けの特徴とその変化を探る。

### 「西洋中世における動物表象のトポスについて—『動物寓意集（ベスティアリウム）』を中心に—」

長友瑞絵

報告者の研究テーマである『動物寓意集（Bestiarium）』は、一般に「ベスティアリ（Bestiary）」と呼ばれ、動物に関するキリスト教的な象徴体系を体現する書物とされてきた。今日でもゲームの動物キャラクターから現代アート作品に至るまで、西洋のキリスト教文化で形成されたこの視覚的・思想的な象徴体系は影響を与え続けている。そこで中世における動物観を改めて考える手がかりとして、『動物寓意集』をはじめとする一連の動物寓意関連の写本について取り上げる。

テキストとしての『動物寓意集』は、その母体である古代のキリスト教的博物譚『フィシオログス（Physiologus）』も含めると、初期中世から14世紀頃という、きわめて長い期間ヨーロッパ全体に流布した。その内容は、動物の習性や伝説を集め、キリスト教の教えと結びつけて寓意的に解釈するというものである。ユニコーンやゾウといった、空想の動物やエキゾチックな動物だけではなく、ウマなど身近に生息する動物についての話が、豊富な挿絵とともに収録されており、中世の動物表象が集積する、いわばトポスを形成している。『動物寓意集』の写本には様々なヴァージョン

のテキストがあり、主題となる動物のレパートリーや挿絵の図像においても多様な展開が認められる。このような変化はしかし、中世における人間と動物という視点を得た時に何を意味するのか。美術史の立場から考えてみたい。

### 「なぜ動物か——『狐物語』の場合——」

高名康文

12世紀後半から13世紀中葉にかけて北フランスで成立した『狐物語』について、1.この作品群の動物と、他のジャンルの作品における動物との違い、2.登場人物が動物であることによって生じる効果、3.動物たちの由来、4.そもそも、なぜ動物なのか、ということを考えていく。

1については、J. ヴォワズネの研究を参照に、動物誌や聖人伝における、キリスト教的な意味を汲み取ろうという意思のフィルターをかけて観察されている動物、寓話における人間の地位や性格に紐づけられて描かれている動物を比較対象として、物語における動物の特性を明らかにしたい。

2については、報告者がこれまで、R. ベロンの研究を参照しながら展開してきた、登場人物が人間相と動物相を持つことから生じるコミックや、そのような性質を軸にして展開するパロディーと関連させながら論じたい。

3については、L. フーレ以降定説となっている、この作品が動物寓話の『イセングリムス』に発しているという説に従いながら、修道院文化に遡りたい。そのために、諺や教会建築、写本における図像について調査をしている。

4については、寓話における風刺からの類推により、パロディーや風刺の対象を直接的に批判することを避けるため、という答えを用意しているが、2と3の関連から他にも答えが見つかるはずだ。